佳作

修学旅行の手紙

加藤　瑞基

平成二十五年九月、妹は宮城県北部にある花山青少年自然の家へ、私は東京、神奈川方面へ研修旅行に行った。特に、私は中学校生活最大の行事で、初めて行ったり見たりすることがたくさんあって、とても楽しみにしていた。そんな気持ちの高揚からか、柄にもなくこの行事の実行委員長になった。しかし、その一方で様々な決め事の話し合いを煩わしく思ったり、研修旅行までの準備期間、日々慌しい気分で過ごしていた。

そんな時、母方の祖母から封書が届いた。その中には、妹と私、それぞれに宛てた手紙と、「祝お泊まり旅行」「祝修学旅行」というお祝いの熨斗袋が二つ入っていた。お小遣いをもらったうれしさと一緒に、正直（修学旅行って普通にみんな行くのにそんなにおめでたいものかな）と疑問も少し感じた。

手紙には、安全に楽しく行ってきてほしいということに加え、祖母の小学五年生の時の遠足、中学生での修学旅行についての思い出が綴られていた。今まで聞いたことのある話もあったが、あらためて手紙文として文字にされたものを読み、新たに感じることがいくつもあった。

祖母は戦後まもなくの生まれだ。東北の山間の小さな村で生まれ育った。今では合併して名称こそ「町」となったが、最寄りの駅までは車でおよそ一時間もかかる山々に囲まれた五、六十軒ほどの小さな集落にずっと住んでいる。祖母の家の前の畑にはサルやタヌキ、積雪が三メートル近くにもなる冬には「クラッポ」とよばれているニホンカモシカが現れるような、のどかで緑豊かなとても良いところだ。

妹の手紙に記されていたのは、祖母が小学五年生の時

の、自分の集落から六キロばかりある集落への遠足の思い出だった。遠足ということで《ゴムの短靴を買ってもらって履いて行ったのですが、足がまめだらけになって、持って行った草履に履き替えました。》と非日常の大きなイベントであったとわかる。自分専用の物など滅多に買ってもらえず、その時初めて「自分」の靴を買ってもらったそうだ。《途中、吊り橋があり、渡る時はすごくこわいと思いました。》と気丈な祖母からは想像もつかない、かわいらしい姿が浮かんできた。さらに、その集落の《区長様が大きなやかんで砂糖湯をくださって甘くておいしかったこと。もう一杯飲みたいなあと思いましたが、おかわりはできませんでした。》それは配給でしか手に入らない貴重な砂糖でもてなしてくださったからだという。子ども一人ひとりの湯のみ茶碗に区長様が言葉をかけながら注いでくださったそうだ。今でこそただの砂糖湯だが、当時としては温かいおもてなしだろうなと感じた。お昼には、《神社のところで、特別に白いお米だけで作ってもらったおにぎりを二個食べて、それまたおいしかったこと、今でも忘れません。毎日のご飯はカボチャやいもがご飯の中に必ず入っていてお米のほうが少なかったのです。カボチャやいもも今のものとは違い、ほくほくでも甘くもないものでした。》妹は、

「えっ。おかずはないの。デザートは。おにぎりだけなの。」

と祖母に電話で何度も聞いていた。《小遣いは三十円で、途中に一軒だけあった小さい店で、生まれて初めてサイダーを飲みました。『ぶく』が入っていて、のどがビリッとして、一口飲んでびっくりしました。吉太君は『ぶく』が出ておもしろいと瓶を振り、蓋を開けた途端に一気に『ぶく』がシュワシュワ出てしまい、こぼれて飲めずに泣いていたのを覚えています。》「ぶく」とは炭酸のことで、「あぶく」のことだ。そこで私は、八月のお盆のお墓参りの時に、

「ばあちゃんの同級生だよ。」

と紹介された、あのおじさんのことかと、思わず大笑いしてしまった。

《その初めて飲んだサイダーの半分をすぐ上のお兄さんのお土産に飲ませてあげたいと大切に持ち帰りました。なんと、家に着いた頃には『ぶく』の出ない少し味のある水だったのです。アハハハ……》という、五年時の遠足のおもしろい思い出だった。

そして私宛ての手紙には、五十数年前に中学二年生で東京、江ノ島へ修学旅行に行ったことが書かれていた。《当時の修学旅行は二年に一度で、二年生と三年生、六十名近くの人で行ってきました。》その頃の地名、東京都港区芝車町の洋品店で働いていた、小学五年の遠足でお土産のサイダーをあげたお兄さんの事前の手紙に「東京の水はまずい」とあったので、《家の近くの清水を、ペットボトルもなかったから水筒に汲んで行ってあげたら、美味しい美味しいとゴクゴク飲んだ思い出もあります。》お兄さんがお土産に《赤い小さなピアノのおもちゃと、大ファンだった『橋幸夫』のブロマイド写真を買ってくれ、友達にうらやましがられました。》微笑ましい祖母の青春時代だ。

その伯父さんと祖母は小さい頃から、ずっと大人になっても仲が良く、孫の私も何度も会っていたし、祖母の話題にもよく挙がっていた。静かでとても面倒見のよい伯父さんで、会うたびに、にこにこしていた人だった。絵に描いたような優しい兄と、おてんばな妹。以前、聞いたエピソードで祖母が二十歳くらいの時に東京にいた伯父さんのところに遊びに行ったことがあり、食堂で昼食をとったそうだ。祖母が「カツ丼」を食べたいと言うと、伯父さんが、年頃の娘が丼ものなど食べるものではないと叱ったそうだ。二人の性格が端的にわかるエピソードだ。

しかし、伯父さんは昨年の梅雨時に突然亡くなってしまった。病気の発作だったという。祖母はかなりひどく落ち込んでいた。私は、突然の別れがつらいのかと思っていた。しかし、手紙から、私が想像する以上の長い年月をともに過ごし、たくさんの思い出が伯父さんとの間にあったのだと、今でも時折涙ぐんでいる祖母の気持ちを思った。

《二日目は、江ノ島の旅館で学校のミスから、「たぬき屋」という名前の宿が見つからず、やっと見つけたら「さぬき屋」という旅館だったのです。》今ではあり得ない出来事だ。《旅館には、同郷から『金の卵』として就職していた先輩達が会いに来てくれました。》高度経済成長期に故郷を離れた人たちだったので、お互いに懐かしくうれしかっただろう。

《小遣いは二千円と決められ、餞別として親戚や近所の方からいただいた千円を加え、合計三千円という大金を下着に縫いつけてもらったポケットに入れて、ドキドキしました。お土産は学校で決まっていて、学校名と「修学旅行記念」とかいてあった手ぬぐいでした。》地域あげての大イベントだったし、お金をあまり使ったことがなかったので、持参した三千円はほとんど手をつけずに帰ってきたそうだ。

《あの頃の東京、初めて見た江ノ島の海、いまでいうと海外どころでない、宇宙旅行にでも行ったようにビックリすることばかりでした。》

当時は、日本の経済が急速に発展していた時代だ。教科書やテレビドラマで見る戦後のその時代は、どんどん物が増え、人々の生活も豊かになり、現在の私たちの生活に近い状態だと思っていた。しかしそれは、東京や大阪などの大都会が舞台であり、祖母の話からすると、都会と東北の山間部とではかなりの格差があった。今、祖母は祖父と母の弟家族と暮らしている。車も一人一台ずつ所有し、携帯電話を持ち、世界中のニュースを知ることも、欲しい品物を入手することも楽にできる環境にいる。都会の生活との格差もだいぶ縮まったのではないだろうか。

昔の話を聞くと、都会と田舎で、時代が一つ違うのではないかと思うくらいである。以前聞いた祖母の話で、祖母の母、つまり曾祖母は私が生まれるずっと前に亡くなっている。その曾祖母は若いころから体が弱かったそうだ。祖母が幼かった頃から病で床に伏しがちで、ある冬に具合が悪くなった。曾祖母は、村の人たちが引いてくれるソリに横たわり布団を掛け、遠くのお医者様の所

まで運んでもらったそうだ。当時、三つ四つだった祖母は、ひどい不安と畏れの中でそれを見送ったのを覚えているという話も聞いたことがある。「都会」では、すでに電車やバスが走っていた頃の話だ。

たったの六十数年間だが、祖母なりにいろいろなことを体験してきたのだとあらためて感じる。祖母は、自分は中学校の修学旅行に行けて恵まれていたのだという。同級生の中には、いろいろな事情で行けない人もいたそうだ。村の先輩たちには早くに家を離れ、都会に就職をした人たちも実際に少なからずいた。

祖母を一言で紹介するなら、「家族思いの人」だ。親を思い、兄弟を思い、夫を思い、子や孫を思い、生活している。畑で汗水流して作った野菜は、家族はもちろん遠くの兄弟や親戚にも送る。麦の発芽から手がける麦芽水あめ、畑の小豆で作るお手製あんこ、笹の葉を採って作るちまき、と私たちが喜ぶものを労を惜しまず作ってくれる。年金が入れば、明らかに品物が揃う便利なところに住む私たちに菓子や果物を送ってくれる。祖母の欲しいものは何か、さっぱりわからない。誕生日等に欲しい物を尋ねても、何もいらないからみんなで顔を見せに来て欲しいというばかりだ。

手紙の最後は《いろんな事が、孫たちが大きくなるにつれ思い出されます。孫はすばらしいです。ありがとう。元気でいってらっしゃい。》としめくくられていた。

私たち姉妹は、祖母や周りの人たちのお蔭もあって大きくなれた。私たちの成長を感じ、このような節目の旅行を迎えられ「おめでとう」という嬉しい気持ちでお祝いを送ってくれたのだ。少々傲慢にも私は「普通」に成長し、「当たり前」に研修旅行も行き、これから先の高校や大学への進学も当然のことと感じていた。

しかし、あらためて考えてみるとそれは決して当たり前に「普通」なのではなく、今の時代の状況の中で「普通」だと思い込まれているにすぎない。私がいま生活する世の中のあり方も、時代の流れの中でさまざまに変わっていくのだろう。私の生きる「いま」が、十年前の

こと、二十年前のこと、それ以上前のことになっていくのだとすれば、「いま」の私は、そのように「いま」が「むかし」へと動いていく最中にあるのだ。不思議な気がする。人はみなそれぞれに自分の生活を生きている。その中で他の人と出会ったり別れたり、さまざまな関係の中で喜怒哀楽を体験しながら生きていくのだろう。とすれば、私が未知の事柄に出会うという場合、それは自分がこれから変化を遂げていくその現場なのだ。これはおもしろそうでもあり、こわいようでもあり、不思議な気もする。祖母の手紙が伝えてくれた温かさから不思議な感覚も生まれてきた。

この不思議さが「生きていく」ということに関わっているのだろう。今の私にはまだよくわからない。だが、そのわからなさを知ることができたのはよかった。わからないと自覚しているために、やがてわかるときも来る可能性があるからだ。祖母は電話で、年寄りは昔話ばかりして嫌だと子どもの頃に思っていたが、自分もいつの間にかするようになってしまったと言っていた。でも、これはわるくないことだ。孫の私に何かをまちがいなく伝えてくれている。そのことで、私は心地良くうれしい気持ちを味わっている。私もやがて後の世代に何かを語れるだろうか。もしできれば、私も自分の子どもの頃のことを子や孫たちに語ってみたい。私の昔物語りは、祖母の話ともまた違った私なりのものになるだろう。さらに私は、自分自身のことだけでなく祖母たちに関しても後々に伝えたい。

昔物語りは、その中味そのものに加え、語る人とそれを聞く人とを繋ぐことにも大切な意味があると思う。そういうことへの明確な捉え方の一部を今回学んだ気がする。やがて「生きることについてのほんとうのこと」がわかってくるものではないだろうかとも思う。

今回の研修旅行は無事に終わり、様々な経験ができた。東北に住む中学三年生として初めて東京に行った自分、実行委員長としての自分、研修先で新たなことを学べた自分、先生や友達との思い出を作れた自分、心配しながらも送り出してくれた両親の子である自分、そして

「ばあちゃんの孫」である自分。今回の手紙でいくつかのことに気付くことができ、「ただ」の研修旅行ではなかった。

十二月には、例年通り畑で採れた野菜をたくさん車に積んで祖父と祖母が我が家にやって来る。その時は、研修旅行でのたくさんの思い出話を話すことにしよう。